様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22520180

研究課題名（和文）活字組版の解明を基盤とする平仮名交り文古活字版の分析書誌学的研究

研究課題名（英文）Analytical bibliography researches on texts in hiragana and kanji of Old Printed Editions based on the elucidation of the standard of the type and the composition.

研究代表者　　鈴木　広光　（SUZUKI　HIROMITSU）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：70226546

研究成果の概要（和文）：本研究は、所謂「古活字版」のうち、特に日本で独自に技術的展開を見た平仮名交り文古活字版の活字規格、組版にはどのような種類のものがあるかを明らかにしようとするものである。古活字版における平仮名活字の使用を網羅的に調査した結果、平仮名活字の規格とその組版には三つの方式があることが確認された。最も一般的な方式は、大きさ（縦寸法）が全角の整数倍で、それをベタ組みするものである。また慶長初年頃刊『徒然草』を調査したところ、10ｍｍ×16.6㎜の全角を基準にした縦寸法が整数倍の活字のほか、1.5 倍の活字があることが判明した。この方式は極めて珍しい。一方、縦寸法が文字や文字列の丈に応じたプロポーショナルな活字で、字間調整を施す組版方式を採用するのは、『無言抄』、『徒然草寿命院抄』、伏見版『東鑑』、烏丸本『徒然草』の四点のみであった。さらに、従来の整版本の記述を基礎とした書誌学の方法では説明することが難しかった異版関係の判断を精密に行なうための分析方法を提唱した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to demonstrate what kind of methods are on a standard of the type size and the composition of types in hiragana and kanji of the Old Printed Editions, so called “Kokatsujiban”, As a result of having investigated the use situation of the hiragana type in the Old Printed Editions cyclopedically, I identified that there were three methods as the standard of hiragana type and the type-setting. The most common method is that the body size (body height) is set an integral multiple of an em and types are set solid. In addition, after investigating printed surfaces of *Tsurezuregusa* published around the beginning of the Keicho era, it became clear that type of 1.5 times of an em was in body size other than types of the integral multiple of an em. This method is extremely rare. On the other hand, there were only four works of Old Printed Editions, i.e. *Mugonsho, Turezuregusajumyoinsho, Azumakagami*（Fushimi ed.）, *Turezuregusa*(Karasumaru Mitsuhiro ed.) which adopted the body size proportion to the length of a letter or ligature and the type-setting method to give the adjustment between characters. Furthermore, I proposed an analysis method to judge the relations of the different edition that it was difficult to explain it precisely by the bibliographical method based on the conventional description of the wood block printing books.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：　書誌学　古活字版　嵯峨本　キリシタン版　書体　活字　組版

１．研究開始当初の背景

古活字版の書誌学的研究は従来、川瀬一馬氏の『増補古活字版の研究』（1967）の分類を基礎に進められてきた。その重要性は今も変わりないが、近年の古活字版、特に嵯峨本研究の進展状況はめざましく、森上修氏による連彫活字の研究、高木浩明氏による嵯峨本『伊勢物語』の悉皆調査により、定説と考えられてきた分類の見直しが行われている。古活字版は整版本と印刷技術も制作方法も異なるにもかかわらず、板本書誌学で培われた分析方法や用語で記述分類が行われている。しかし、古活字版に特有の活字制作や組版工程にもとづく異本生産のメカニズムが働いている以上、そのことを前提とした分析や記述分類が行われることが望ましい。しかし、古活字版は一部を除いて活字や印刷器具が残っていないため、前提となる活字制作から印刷に至る工程の全容はまだ解明されていない。研究代表者（鈴木）は以上の問題意識から、特定領域研究「江戸のモノづくり」における研究課題「嵯峨本の印刷技法の解明とビジュアル的復元による仮想組版の試み」（平成 16・17 年度、研究代表者）において、古活字版研究に高精度デジタル画像解析の手法を導入し、印字画像の切り出しと電子付箋によるデータベース化を行い、嵯峨本『伊勢物語』第一種本で使用された活字の種類（数）、活字規格、組版技法などを明らかにした。またこの手法を印刷文字の字体・書体研究に応用し、基盤研究（B）「平仮名字体・書体の変容と印刷技術および出版メディアとの関係に関する歴史的研究」（平成 17～19 年度、研究代表者）において、古活字版～整版～明治活版への印刷術の転換と出版メディアの発達という文字をめぐる環境の変化のなかで、肉筆では伸縮自在に連綿で書かれることをむねとしてきた平仮名が、文字を切り離す活字の規格によっていかに字体や書体を変化させてきたのかを、とくに古活字版と近世木活字本の印字分析を通して明らかにした。同時に整版説が提出されていた烏丸本『徒然草』については、それが紛れもなく活版印刷物であることを上記の方法で証明した。ただし、その一方で、次の「研究の目的」に記すように、残された問題や発展的に考察すべき課題も見出されてきた。

２．研究の目的

本研究は、所謂「古活字版」のうち、特に日本で独自に技術的展開を見せた平仮名交り文の古活字版について、印刷技術（文字の活字化と植字組版工程）に照準を据えた基盤整備を行ない、さらにその応用として、従来の整版本を基礎とした書誌学の方法では困難な、異版関係の判断を精密に行ない得る分析方法を構築・提唱しようとするものである。具体的には以下のような問題意識にもとづき、それを解明することを目的とする。

(1)　嵯峨本をはじめ、多くの平仮名交り文古活字版が全角の縦寸法を基準にその整数倍の規格によって活字が製作され、ベタで組まれていることは既に指摘したが、烏丸本『徒然草』のように規格が明らかでない（規格がない）ものもある。平仮名交り文古活字版の版面を出来るだけ多く調査することで、活字がどのような規格によって製作され、組版されているのか、さらにそのような規格組版がなぜ採用されたのかを平仮名という文字との関係から考察する必要がある。

(2)　キリシタン版国字本の活字が古活字版の特に連続活字製作に影響を与えたという説がある。研究代表者はこの説に必ずしも同意しないが、共通点と相違点を連続文字列の活字化という観点から調査することで、両者の、あるいは古活字版の活字の特徴を明らかにすることができるであろう。

(3)　嵯峨本『伊勢物語』慶長 13 年第一版諸本内での異本生成のメカニズムは、組版時における同一字（同一文字列）の活字を差し替えたものとして説明できるが、慶長 13 年にはさらに二度、該書が版行されている。二版、三版の摺刷時にはそれぞれ新たに活字が追加されているので、第一版からの襲用活字と新彫活字がどのように使用されているかを調査することで、それぞれの版行の特徴や意図をさぐることが出来るのではないか。
(4)　以上のような活字規格、組版技法、異版生成のメカニズムの観点から、古活字版の分析記述を精密化することを検証するために、組版工程を再現するための２DCG を用いた「古活字版シミュレータ」のプログラムを作成する。

３．研究の方法

(1) 平仮名交り文古活字版の活字規格と組版を分類するための調査と分析
①　慶長初年頃刊『徒然草』（国文学研究資

料館蔵）を新たに複写物（高精度デジタル画像データ）の形で入手する。業務用 1600 万画素デジタルカメラで、レンズを原資料に対して正対する形で撮影し、さらに 300dpi の精度を確保する。RAW データから TIF への変換、画像劣化を抑えるための幾何変形、傾き修正等の画像整形を行う。撮影・画像整形は、業者に依頼し、DVD－ROM に収めた形で入手する。このデジタル画像データから、印字を活字ごとに矩形で切り出し、電子付箋に調査項目を付してデータベースを作成し、印字寸法、文字連続の仕方、語・文中における使用環境等の基礎的情報を蓄積する。作業は研究協力者津田光弘氏作成の画像解析プログラム iPallet／kumu を用いて行なう。なお、該書には落丁があること、書き入れ等によって判別しがたい印字があることから、活字種の数を明らかにすることは断念し、その概要を知るにとどめた。印字画像データベースの活字種の概要や印字丈の情報をもとに、活字規格と組版技法を推定する。この推定成果を画像にグリッドをかける形で可視化する。

② 国立国会図書館を中心に国内に所蔵される平仮名交り文古活字版を調査し、それをもとに活字組版の方法の分類を行なう。調査が困難な場合は、『古活字版史料』等の零葉集によって確認する。

(2) 平仮名交り文古活字版の活字書体、特に連続活字の特質を明らかにするために、キリシタン版後期国字本との比較を行なう。キリシタン版国字本は『さるばとるむんぢ』（1598 年）、『どちりなきりしたん』(1600 年) を資料とし、古活字版は『徒然草』2 種、嵯峨本を資料とする。連続文字列の活字化とその使用、組版時における行の意識等の観点から両者を分析する。

(3) 嵯峨本『伊勢物語』第二版、第三版の版行や異版関係の特徴をさぐるために、第一版からの襲用活字、第二版、三版で追加された新彫活字がどのように使用されているかを調査する。各丁ごとに襲用活字と新彫活字の使用割合と使用状況をまとめ、分析する。使用するのは、第二版が国立歴史民俗博物館蔵本、早稲田大学図書館蔵本、ノートルダム清心女子大学蔵本、第三版が京都大学附属図書館蔵本である。

（4）上記の事項、特に古活字版の異本生成のメカニズムや検証したり、連続活字、倍格活字使用の意図を探るためのプログラム「古活字版シミュレータ」を研究協力者の津田光弘氏とともに開発する。活字セットは嵯峨本『伊勢物語』慶長 13 年刊本から切り出した印字画像データによる。プログラムは『伊勢物語』ほか任意のテキストを入力し、そのテキストの文字、文字列に対応する活字群を活字セットから呼び出し、選択して組版するという仕様のものを計画した。

４．研究成果

(1) 平仮名交り文古活字版には以下の三つの規格・組版のフォーマットが存在することが明らかになった。

① 活字の幅（横寸法）が一定で大きさ（縦寸法）がプロポーショナル。この方式を採用する古活字版は、里村紹巴校閲・応其編『無言抄』(第一種本の無刊記本、慶長四年（1599 年）跋)、宗巴『徒然草寿命院抄』(如庵宗乾印行、慶長九年（1604 年)）伏見版『東鑑』（慶長十年（1605)）と烏丸光広本『徒然草』（三宅亡羊印行、慶長十八年跋）の四点しか確認できていない。『無言抄』は序文と目録がこれに該当、『東鑑』も本文のほとんどは漢文であり、ごく一部が平仮名交り文である。『寿命院抄』は上下巻あわせて二百丁を越えるが、平仮名活字は上巻第三丁から六丁までの間で、徒然草からの引用語句部分にのみ使用されている。本文全体を縦寸法はプロポーショナルの仮名活字で組むのは、烏丸本『徒然草』のみである。この活字では、文字の横揃いは起こらない代わりに、下辺調整のために込め物を使用して組版を行なわねばならず、他の書物に活字を転用することもむずかしい。さらに、嵯峨本で行なわれたような組版時に活字を部分的に差し替えて意図的に異本を作るといったことも容易ではない。

② 規格活字で全角の整数倍規格の活字をベタ組みする。曲直瀬玄朔『延寿撮要』第一種本（慶長四年頃印行か？）以降、平仮名交り文の木活字印刷本のほとんどがこの方式を採用している。

③ 規格活字で全角の整数倍活字と 1.5 倍格の活字を原則ベタ組みする。慶長初年頃刊『徒然草』と同じ書体の活字を用いた『源氏物語』の版本のみこの方式を採用している。活字規格は全角が 9.9～10ｍｍ×16.6㎜ で、縦寸法がその２倍、３倍および 1.5 倍の活字がある。他の古活字版と比較して全角が扁平である。これは活字ボディいっぱいに文字を彫り、文字間を出来るだけ近接させることで連綿風を再現しようする意図に出るものと解釈される。1.5 倍格活字に載せられるのは、漢字活字および長い「に」「し」などの仮名、２字連続仮名である。一行に必ず偶数個配植される。この 1.5 倍格の活字のおかげで、文字の横揃いの印象をかなり避けることができるという利点がある。なお版面と印字の精査の結果、該書の組版にはインテルが使用されていないことも判明した。

④ 全角を基本に整数倍の規格活字をベタ

で組むという方式は合理的だが、連続活字を使用しても文字が横に揃い、漢文のように整然とした版面になる可能性がある。特にテキストを組むことに主眼がある版本では、版面に文字を詰め込むために活字規格も小さくなり、文字の伸縮自在さが制限されるために、文字の粒が揃ってしまう。このように活版印刷術の論理が版面に色濃く現れた平仮名交り文の古活字版は、さまざまな方法が試行される慶長年間よりも、整数倍の規格活字をベタで組むことが優勢になる元和・寛永年間と推定されるものに著しい。これに対して、嵯峨本だけは、筆写文字よりも文字の伸縮自在さをデフォルメして、極端に大きさ（縦寸法）が異なる字母を作成したり、文字数と倍格数が一致しない連続活字（三倍格二字連続など）作成するなどして、規格化による版面の画一化を避ける方策を採っている。嵯峨本のみ版面に自由闊達さを再現し得たのは、文字の形や配置に対する意匠のコンセプトが明確であったからであるが、それは角倉素庵らが同時に行っていた装飾料紙への和歌の揮毫などによって培われた感覚の反映であったと考えられる。
⑤この研究成果は〔学会発表〕①で発表した。また平仮名を活字にすることの問題点とその克服、解決のあり方が、明治活版印刷術揺籃期と古活字版とで共通することを論じた〔雑誌論文〕①を公刊した。

(2) キリシタン版と古活字版の活字製作・組版技術に表れた言語認識のあり方の特徴（特に相違点）は以下の通りである。
①　連続文字列の活字化については、調査の結果、以下のような傾向を確認することができた。キリシタン版の連続文字列活字化の特徴は、高頻度語（特に助動詞）や語の一部（活用部分や形態素）、本語など使用を予測しやすい文字列を活字化しており、使用についてもそれを逸脱することが少なくヴァリエーションは多くない。逆に使用を予測しづらい連続活字の使用語はヴァリエーションが豊富である。それに対して、嵯峨本『伊勢物語』では、一度しか使用されない連続活字が非常に多く、それらの活字は文字連続からどんな語（語の一部）に使用されるのか、にわかに判断がむずかしいものがある。また文字列が語や語の一部を想起しにくい連続活字は、使用回数が少ないだけでなく、使用語が一定していない。同じ古活字版でも、烏丸本『徒然草』は使用される語および語の一部を想定しやすい（＝頻用されやすい）連続活字が多く、そうでないものは、嵯峨本『伊勢』と比較して割合的に少ない。
②　キリシタン版国字本の連続活字の連綿が自立語をまたがないことはすでに指摘があり、仮名連綿のあるところには自立語の切れ目がないことが保障され、可読性の向上に工夫が凝らされている。古活字版では、烏丸本『徒然草』では連綿が自立語の開始をまたぐ例は少なく（ないわけではない）、嵯峨本『伊勢』では自立語の開始をまたぐ例が珍しくない。またキリシタン版国字本は欧文ハイフネーションを適用したかのように、改行にいくつかの規則がある。これはプロポーショナルな組版ゆえに可能な措置である。
③　キリシタン版国字本は有意味な単位として切り出したものを活字に載せるだけでなく、植字・組版においても単位、具体的には「語」を意識しつつ活字を選択したので、言語学的分析に耐える。これはレディ・メイドの規格品として活字セットを揃えなければならない鋳造活字の技術的特徴に由来するものである。一方、必要な文字や文字列をその都度追加していけばよい彫刻活字の古活字版と異なる。ただし、本文を読者にどのように提供するかという観点も、考慮に入れる必要がある。キリシタン版国字本が「語」や「行」などの意味的単位を意識して組版を行なったのは、日本人に馴染みのないキリスト教を正確に伝える必要性からであろう。烏丸本『徒然草』も句点活字および濁点使用や語の同定や文の意味解釈の確定に意識的である。キリシタン版同様、連続活字が自立語の開始をまたぐことが極めて少ないのはそのためではないかと考えられる。一方、嵯峨本『伊勢物語』は一点物の工芸品として製作されたこともあり、活字製作や組版では読解よりも美的な意匠を優先させた可能性がある。
④この研究成果は〔学会発表〕②で発表した。またその世界史的背景や活版印刷術に通底する論理について論じた〔雑誌論文〕③を発表した。

(3) 古活字版の異版関係のあり方については、嵯峨本『伊勢物語』慶長 13 年刊の第一版から第 3 版までの新彫活字と襲用活字の使用状況を詳細に検討することで、以下のような成果を得た。
①　第二版の活字セットにおける活字種（異なり数）は、第一版からの襲用活字が七割を占め、新彫活字は三割程度にとどまる。また第一版の活字種のうち、第二版に襲用されたものは優に八割を超える。これらのことから、第二版の摺刷が主に新彫の活字によってなされたという従来の説はしりぞけられる。
②　活字種の数のみならず、その使用数の合計（延べ数）でも襲用活字の方が多い。それにもかかわらず、①でしりぞけた説がこれまで支持されてきたのは、上・下巻の冒頭がすべて新彫活字で組まれており、その刷り上がりの鮮明さが印象的であったためと推察される。

③　慶長十三年の刊語を持つ嵯峨本『伊勢物語』の第一～三の三つの版は各々異なる制作意図を以て版行されたと考えられる。とくに第二版の配植・組版には第一版を刷新することを意図したと考えられる特徴が看取される。
④この研究成果は〔雑誌論文〕②に発表した。

(4)　嵯峨本の活字セットをCGで作成、それを組版して異植字版、部分異植字版を作成することができるプログラム「古活字版シミュレータ」（暫定版）を作成した。このプログラムによって、古活字版における異版生成のメカニズムや、版面における連綿活字、倍格活字の使用意図などを探ることが可能になった。プログラムまだ暫定版のため、一部の研究者にIDとパスワードを配布してURLを通知するという限定的な公開にとどめているが、寄せられた意見などを集約したうえで改良し、完成版を公開したいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 鈴木広光、「活字の論理―日本語活字印刷史序説―」、『叙説』、査読無、40号、2013年、p.p.118-134
② 鈴木広光、「開化の軋み」、『文学』、査読無、12巻3号、2011年、p.p.154-168
③ 鈴木広光、「嵯峨本『伊勢物語』慶長十三年刊第二種本の活字と植字組版について」、『汲古』、査読有、59号、2011年、p.p.25-30

〔学会発表〕（計２件）
① 鈴木広光、「キリシタン版と古活字版―活字・組版にあらわれた言語認識の相違―」、国語語彙史研究会第102回、2012年12月1日、関西大学
② 鈴木広光、「古活字版に見る平仮名交り文書記様式と印刷技術との相克」、近世京都学会第一回研究大会、2012年7月15日、京都外国語大学

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
鈴木　広光（SUZUKI HIROMITSU）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：70226546

(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
津田光弘（イパレット代表）